

小中生が火山砂防の独自研究発表 11月に山梨でフォーラム

2014.7.15 02:06 (1/2 ページ)



富士山の火山防災研究発表用の基礎知識を得る学習が始まっている＝富士吉田市立吉田中学校

全国の活火山周辺31市町村が中心となり、平成3年から始めた「火山砂防フォーラム」が、今年は11月6日に富士吉田市で開かれる。フォーラムでは有識者らの講演やパネルディスカッションとともに、開催地の小中学生が火山に関する独自研究を発表することになっている。地元の富士吉田市で市立吉田小6年・吉田中1年の児童生徒が研究発表に向けて基礎知識を得るための学習を始めた。

同フォーラムが山梨県で開催されるのは初。「火山を知り、火山と共に生きる。～世界遺産富士山と火山防災対策～」が今回のテーマ。児童生徒のフォーラムでの研究発表は、研究を通じて富士山の環境保全と火山防災への意識醸成が狙い。NPO法人土砂災害防止広報センターが講師派遣して学習を支援している。

今月11日に吉田中で開かれた学習では、県富士山科学研究所の研究者や同広報センタースタッフが噴火による被害を少なくする活動や災害に強い町づくりなどに関する基本的な知識を生徒に提供した。1年3組の学習では富士山形成史から始まり、これまで富士山の大噴火は15万年前が最古とされていたが、30万年前にも噴火があったとの研究内容が示された。「宝永噴火」(1707年)では江戸に火山灰が積もったが、吉田中がある同市上吉田辺りは富士山の麓にありながら火山灰が積もらなかった話が紹介された。「なぜ」と生徒が声をそろえると講師の研究者は「風向きだ。噴火したとき、どこに逃げるか。風向きが大事だ」と教えた。

授業を受けた渡辺彩加さんは「噴火のメカニズムを知ることで、避難路を選べば影響が少ないことが分かった」と話し、研究課題として「火山の歴史を細かく調べ、次に富士山が噴火した場合、自分たちがどちらの方向へ逃げるべきかを研究してみたい」とも話して、テーマを見つけ出したようだ。

学習は1、2学期に10時間を予定。中学生の火山防災に対して、小学生は富士山が世界遺産であり続けるための環境活動を学ぶことになっている。